環境問題の時間・空間的表現

水越　厚史

近畿大学医学部環境医学・行動科学教室

もしタイムマシンができて，未来を覗くことができたら，果たしてその未来を受け入れられるだろうか？これは，安部公房の小説「第四間氷期」[1] のテーマである。この物語は，一人の研究者が未来を予言する電子計算機を開発し，そのアプリケーションを模索しているうちに，何者かに自らの存在が脅かされ，やがて想像を絶する人類の未来を知ることになる，というSF小説である。未来では地球環境が大きく変化しており，いわゆる環境問題についての考察，と捉えることもできる。人と環境の関係において時間軸を俯瞰して，そこに日常性の断絶があったときにどうするか，読者に大きな問いを投げかけている。ここでは環境問題について改めて考えてみたい。環境は自然に，あるいは人の活動により変化し，一方，人は個体，あるいは種として，状態を変化させながら環境に適応している。環境問題は，人と環境の均衡のくずれ，あるいは人と環境の状態の差分の大きさによって引き起こされる問題と考えられる。これを，横軸を時間にして示すとFig. 1のようになる。なお，この環境問題の表現は量的なものであり，質的に定義するには，さらに人為性によって規定されることが必要となるだろう。その場合，環境問題は倫理的な問題の範疇にもなるかもしれない。Fig. 1に示した通り，環境の変化は加速度的に起きているように思えるし，また，「第四間氷期」のように断絶もあるかもしれない。空間的な変動は縦軸に含まれるが，人と環境を境界によって分けた空間の内側と外側と捉えると，境界の位置によって含まれるものが変わってくる。例えば，室内環境は，人と室内環境の関係においては外側になるし，屋外環境と室内環境の関係においては内側と考えられる。人と環境にある空間的変動要因をどちら側と見做すかにより，問題も変わってくるといえる。人と環境の状態の差分を減らすことを考えると，この時の対策として考えられるのが，気候変動対策でいうところの緩和と適応だろう。緩和は環境の変化を抑え，適応は人が変化することといえる。さらにいうと，緩和は外側を内側に寄せ，適応は内側を外側に寄せることであり，これらは対策の起点が異なる。適応している状態が最適化されているとすると，環境が変化したとき，適応するために内側を外側に寄せることにより状態が崩れ，「第四間氷期」のようにその差分による影響を受ける可能性がある。このような内側の差分による影響も環境問題の類型といえ，どう折り合いをつけていけばよいか，考えていかなくてはならない。

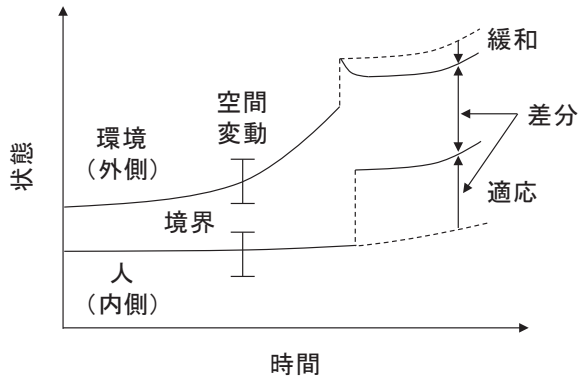

Fig. 1　環境問題の時間・空間変動

引用文献
1) 安部公房：第四間氷期，新潮文庫（1970）